

木下高太郎  
全集

1

大正六郎

三三

# 木々高太郎全集

1

人生の阿呆 ほか

朝日新聞社

# 木々高太郎全集

## 1



人生の阿呆<sup>ほか</sup>

---

定価 980 円

昭和 45 年 10 月 25 日 第 1 刷発行

著 者 木々高太郎

著作権者 林 峻一郎

装幀者 原 弘 (NDC)

発行者 朝日新聞社 大田信男

印刷所 図書印刷株式会社

発行者 朝 日 新 聞 社

© Shunichiro Hayashi 1970

東京 大阪 北九州 名古屋

---

木々高太郎全集 1

目次

|        |     |
|--------|-----|
| 網膜脈視症  | 7   |
| 睡り人形   | 24  |
| 青色鞏膜   | 45  |
| 恋慕     | 70  |
| 就眠儀式   | 87  |
| 完全不在証明 | 111 |
| 医学生と首  | 128 |

幽霊水兵 ..... 144

決闘 ..... 185

胆嚢(戯曲) ..... 203

\*長篇小説

人生の阿呆 ..... 234

印度大麻 ..... 364

作品解説 中島河太郎 ..... 389



木々高太郎全集 1

人生の阿呆ほか





# 網膜脈視症

## 1

晩秋の風が吹き荒<sup>すさ</sup>んで、外は寒いが、太陽は輝いているから、閉め切<sup>し</sup>って、スチームの通っている部屋の中は明るくて暖い。××大学附属精神病院の診察室で、大心池先生が熱心に患者を診<sup>み</sup>ている。

先生の右手の傍には大きなテーブルがある。その廻<sup>まわ</sup>りには、三人の医員と四人の学生とが坐<sup>ま</sup>って、先生の診断や注意を、片言隻句<sup>へんげんせきく</sup>も聞き逃<sup>は</sup>がすまいと、しきりに書きとっている。

先生は××大学の精神病学の教授で、一週二回、大学で診察と臨床講義<sup>りんしょうこうぎ</sup>をするほかに、一週二回、この郊外の付属精神病院で診察をすることになっている。どちらで診察した患者でも、入院許可を得るとこの病院の方へ送られてき

て、主治医がきめられることになっており、入院している患者は毎週土曜日に診察する。これが大心池先生の一週間の日程である。

学生は大学の方で先生の臨床講義を聞くばかりでなく、この病院の方へ交代で実地の見習いに来る。今は、四人の学生が実習に来ているが、診察室へ出るときは、カラーをつけて白衣を着て出ること<sup>に</sup>きめられているから、学生とは見えない。しかし独立して患者を診<sup>み</sup>ることは許されな<sup>い</sup>。医員の受け持<sup>も</sup>った患者を医員介補として診<sup>み</sup>るのである。

今、大心池先生は一人の患者を診<sup>み</sup>てしまつて、診察室から連れ去<sup>も</sup>らせた。そして学生と医員の方へぐるとその回転椅子をまわした。

「面白い患者<sup>おもしろい</sup>だったね。どこにも病的なところはない。た

だ一つの観念だけ違っている。自分は神だと考えてる。面白いのはその証拠だ。二十一歳のときに遊廓に行った。ところが正常のアクトができなかった。してみると自分は男じゃない。そんなら女かというに形態は女じゃない。そこで男でもない女でもない。だから神だというのだ。このように定型的に來ると診断は楽だね。何だか判るかね」

そう言つて先生は学生の方へ眼をやつた。

「バラノイア(偏執狂)でしよう」

「そうだ。バラノイアだ。しかし、この、いったい、バラノイアというやつは、精神病学の第一ページだけ学んだ人にも診断がつくくらい容易だ。患者の指南力(しなんりき)は変化がない。感情界も意志界も変化がない。ただ一つの観念だけ間違っている。だからそのことだけ見つけてしまえば診断はきわめて楽だ。しかし、入るには楽だが研究して行くと一番奥深い病氣だ。大脳生理学のうちでいちばんむずかしい。いわゆる、論理的思惟法則に関する病氣だからだ」

医員も学生も、診察後に先生が洩らす、こういう説明をいちばん教訓的であると考えている。先生の話は、かならず将来その患者について思い当ることが出て來るほど、いつも適切だからである。

先生は机の上に並んでいる予診カードを数えながら「次

の患者を」と言つた。

次の患者は九歳になる男の子であつた。母親がつきそつてゐる。三十歳くらいの、瘦せた、身装(みなり)など立派な母親である。

「この子は、今年小学校の二年ですが、生まれつき神経質で困つていたのでございます。三つくらいの年齢まで、父親に少しも懐きませんで私にばかりつきまとつておりました。もつとも父親が病氣いたしておりましたことも原因だつたのでございましょうが。ところが、三歳か四歳の頃に急に今度は父親の方へ懐き出しまして、反対に私に対して冷淡な態度を取るようになったのです。年齢が進むにつれて、極端でなくなりはいりましたが、それでも今も私よりも父親の方へよく懐いております。もつとも父親が健康を恢復(かくふ)いたしましてから、上海(シャンハイ)の方へ行つて留守でございまして、帰つて來たときなどは、それはもう夜も寝ないくらい父親につきまとうのでございます」

先生は、母親の話を聞きながら子供を見ている。子供は先生の前の椅子にかけて、女の子のように眼を伏せてゐる。先生は予診のカードを見ながら、

「何か馬を怖(こわ)がつたということはないか」と聞いた。

「はい三、四歳のころ非常に馬を怖がりまして、町を歩い

ておつても、一町くらい向うにいる馬を不思議に知りまして、泣き喚いて歩かないのです。馬の絵や玩具をも怖がらまして、絵であるのに、今にも咬まれると、ほんとうに思ふらしいのです。ところが、それが突然に少しも怖がらなくなつて、むしろ好きになつて来たのです。不思議にもその後、今度は鼠だの、虫だの、そういう小さいものを怖がるように變つて参りました」

「そういう小動物は、馬を怖がつたところには少しも怖がらなかつたのですか」

「どうも気がつきませんくらいでしたから、怖がらなかつたと存じます」

「それから、もっと成長してからの話と、現在の話をして下さい」

「馬を怖がらなくなりましたから、町は歩けるようになりましたが、今度は鼠が怖く、とくにその死骸が怖いのです。ところが怖いくせにじつと見ていて離れられぬのです。道端に鼠の死骸がありますと、慄えていながら、それでもその死骸を誰か片づけてくれるまで立ち止まっているのです。ですから学校へ行く道に鼠の死骸がありますと、学校を遅れるのもちろん、二時間くらいその傍に立ったり、しゃがんだりいたしましたして、そのまま家に帰つて来ること

もあるくらいで、仕方ありませんから小学校一年生のときは、毎日書生に送り迎えをして貰つたくらいです」

「二時間くらい見ていると、自然に怖くなくなりますか」

「さあ、それはわかりませんが、学校へ行く途中立ち止つてしまったのは、まあもつとも長いときで二時間くらいでございました。やはり自然に興味がなくなるようでございます」

「それで今日診察を受けようと考えられたのは？」

「はい。今年六月、父親が上海にまいりまして、ついこの十月十六日に帰つてまいりましたが、電報もよこさず突然朝早く家をたたき起したものですから、元来眼ざとい子供だものですから一番さきに起きました。その驚きのためにございましてでしょうか、急に火が見える、火焰が見えると呼び出しまして、父親にしがみついたり、私にしがみついたり、一時間ばかり大騒ぎなのです。とにかく眼を診てもらえというので、近所の眼科の先生のところへ連れて行きました。が、視力も少しも差支えがない。どこといつて眼の悪いところはないのです。それからこの妙な発作が起りはじめまして、だんだん回数が多くなり、しばらく小児科の先生に診てもらいましたが、それは幻視といつて、眼の前に何も無いのに見えるので、精神病の徴候かも知れぬと

言われましたので、それで先生のところへまいりました」

「その何か見えるのは、もっと小児——そう、三、四歳のときも、ありましたか」

「いいえ、なかったようです」

先生はしばらく母親の顔を見つめながら、黙っていた。大心池先生の顔は怖い顔である。何か人の肺腑を見透すような眼を持っている。その眼は瞬間に全身を見てしまった。そして、今度は子供の方へ向いた。

「自分の名前を言うてごらん」

「松村真一」

「お父さんの名前知ってるかい」

「うん。松村平助」

先生はこのとき医員の方へ向いて、ストップ・ウォッチと言った。そしてストップ・ウォッチを手にとりながら、子供に、自分の名と父親と母親の名前を言わした。くりかえして三度試みてから、その潜刺戟時を医員に書きとらした。自分の名前が、一秒三五、父親の名前が四秒〇二、母親の名前が二秒一五であった。先生は母親の方を向いて、もう一度念を押した。

「お父さんに初め懐かなくて、あとではかえってお母様よりは懐いたのですね」

「そうです」という返事を受けとったあと、何か先生はちよっと尋ねようとしてやめた。

先生は看護婦に命じて研究室から実験用の白鼠を持って来させた。子供は白鼠を見せても別に怖がらなかった。先生は白鼠を自分の手でもって、子供の右手に近づけた。子供は平気でいた。

先生は次に看護婦にピーカーを持って来させた。これに水を入れ、かたわらのインキ壺を傾けてタラタラと五、六滴のインキを混ぜた。そして白鼠をドップリその中に浸した。白鼠が灰色に濡れた。

「どうだい。君。怖くないかい」

「ううん、怖くない」

「そんなら触れるかい」

「うん」

子供はかえって物珍しそうに、指を出して濡れた鼠にちよっと触れた。先生は別に失望もせずに、予定してあることをやるといったふうに、少しも停滞せずに次のことを行なった。今度はメスと陶盤を持って来させた。陶盤の上で鼠にザクリと刀を入れた。鮮血が白い陶盤を染めて鼠は死んだ。

しかし、子供は、平気で見ていた。

ここで先生はじっと考える。先生が患者を前にして考えるに沈まるときは、診察室全体に異様な空気を起させる。それは先生の意志が、部屋にいる人を縛りつけるような感じである。先生は、じっと子供を見ている。子供は先生を見たり、医員を見たり、白鼠を見たりしている。

やがて先生は看護婦に命じて、もう一つの陶盤を持って来させた。血に染まった白鼠を、インキの水で丁寧に洗って血を取り去った。その死骸を黙って陶盤の上にのせて、子供の眼の前に出した。ここではじめて予期した反応が現われて来た。子供の顔には明らかに恐怖の色がある。子供は緊張した顔をして、血のついていない鼠の死骸を見つめた。そしてその眼は固定されたように動かない。

先生はストップ・ウォッチをとり上げた。

「どうだい。君の名前を、もう一度言うてごらん」

子供はチラと先生の方を見たが、すぐまた鼠を見た。そして鼠を見ながら答えた。潜刺戟時は三秒五五である。次に父親の名前を聞いて見る。二秒一五である。母親の名前は、四秒〇三であった。先生は医員にこの時間を書かせた。学生はこの珍しい診察に引き入れられて、息もつかずに先生と子供を見ている。

しばらくの間、先生はそのまま見ている。子供の眼は、

相変らず鼠に引きつけられている。

先生は看護婦をそっと呼んで、静かに命じた。まず先生のうしろの窓かけを引かした。窓かけは緑色の厚い布であったから、部屋は少し暗くなった。さらに命じて先生の横の窓かけを引かした。部屋は少しうす暗くなりかけて来た。さらに第三の窓かけを引かして、子供の前方にある窓かけはみな引かした。光は子供の右斜めと後方の窓からだけ入るようになった。この第三の窓かけを引くや否や、子供はわっと泣き出して、傍の母親にしがみついた。その顔は、真の恐怖の表情に溢れている。

「赤いものが動くか」と先生が鋭く聞いた。

「動きます。動きます」と子供は答えてなお激しく泣いた。

## 2

大心池先生は、この珍しい診療を済ませて、患者を退場させた。そして入院を許可した。

先生は学生の方へ向いて「診断は」と聞いた。

「動物恐怖症です」

「そうだ。症状は確かに動物恐怖症だね。しかし診断は動物恐怖症では困る」

「官能性神経症ですか」

「そうだ、大人の神経症に相当するもので、特に小児神経症として分類する。それが診断だ。症状の主なるものは動物恐怖症だが、いったい、動物恐怖症は何から来るか」

「エディプス観念群です」

「そのとおりだ。君はよくできるね。——エディプス観念群が主体で、その原因は父親恐怖だとフロイドは説いている。私の研究してみたところでは、日本人にもこのエディプス観念群に相当するものがある。特に上流家庭の子供に多いようだ。この例では、馬恐怖症があった。馬は父親代理で、父親を怖がる恐怖は「*ペナルティ*」迫せられて、そのかわりに馬を恐れることになったのである。男の子だから母親に懐いて父親を怖がるのは定型的で、フロイドの例にもあるとおり明瞭だ。ところが、三、四歳を時期として急に変換が起り、今度は父親に懐き出した。同時に馬恐怖症は消失して、鼠のような小動物恐怖症になってしまった。しかし、君達も見たように父親恐怖は残っている。現在父親の方へ愛着が多いという症状があるにかかわらず、名前を言わせてみて、制止の有無を調べたところ、父親の名前に対して、一番制止が多い。自分の名前は一秒三五で、母親が二秒一五であるが、父親は四秒〇二の潜刺戟時をしめた。子供だからこの潜刺戟時に作為があると少しも考える必要

はない。ところが、鼠の死骸、それも血のついていない死体が何か観念群の中に入り込んでいる。しかも入り込んでいるが、制止的因子として入り込んでいるのではけつしてない。第二の測定でみると、鼠を見つめているときは、もちろん注意が奪われているから、自分の名前を言うにも潜刺戟時が三秒五五となっている。すなわち延びている。母親の名前は四秒〇三でほとんど同じであるが、父親の名前だけは延びていないで、かえって短縮し、二秒一五となっている。すなわち父親の名前だけは、逆に制止が取り除かれている。つまり、なにか鼠の死骸と父親に対する愛着とが結合しているね。これは君不思議だね。研究すべき問題がここにある——それから主訴となっている烙印がみえるというのは、何だかわかるかね。私の実験が見事に適中したから、この実験をよく見ていると判ったかも知れん」

学生には、誰も判る人はなかった。先生は、学生が黙っているのをみて医員の方へ向いた。

「君達の意見はどうかね。幻覚じゃないよ。幻視じゃないよ。実に明瞭な生理現象だったよ」

医員にも判らなかつた。そこで先生は、続けた。

「君、生理学が眼科学で習うだろう、網膜脈管視というやつを。われわれの眼の網膜には、視細胞の前に血管が走っ

ている。光は前からくるのだから、この血管の影はつねに網膜の上にさしているわけだ。けれど、われわれは正常のときは自分の眼の血管は自分では見えない。いつも同じ所にあたるから習慣的にわからなくなつて、邪魔にならぬと説明してある。ちょうど眼の水晶体を透して、すべての物体の像は網膜には倒像として写るが、われわれは物体をさかさだと思わぬとおなじだ。ところが、光が前方からこないで、斜めからくるようなときには、時とすると自分の網膜の血管を自分で見ることがある。それは血管の影が、いつも当らぬところに斜めに像を落とすものだからで、一生そんな機会を持たぬ人もあるが、一度経験すると、ときどき気づくものだ。かつてこれが見え出して、いつでも見える患者があった。そのためにはかの物を見ることが出来ないくらい、自分の血管が邪魔になる。私が網膜脈視症となづけて、学会で報告したのは、その例だった。多くは薄暗い部屋で、強い光線が斜めにくるときに起る。特に鞏膜の先天的に薄い人に多い。時とすると、血管の中を赤血球が動くのがみえる。赤いものが動きますと、先刻子供が言うたのは、この赤血球を見ていたのだ。おそらくあの子では、何か神経症の原因と網膜脈視とが結合しているね。これは精神分析を施してみればわかる筈だ。そして、その原情

景、すなわち、結合したときの情景をつきとめたら、すぐ

治療が出来る。精神分析療法は日本人でもある場合にはきわめてよい結果をえているから、やる価値がある。小児神経症は少しむずかしいが——これは、そうだ、岡村君に、主治医になつて貰つて、ひとつ検査、治療をしますかね」

学生が「先生、神経症というのは面白いものですね。精神病学ではもっとも理論的の部門ですな」と言った。

「もっともとは言えぬが、フロイドが出てから理論的になった。精神分析というと、皆がいやがる。あれは精神分析の理論を、神経症だけでなく、正常人にも及ぼそうとするからいやがられるが、実はフロイド自身にもそうした癖としか好みというか、あるのだがね。しかしとにかく、精神病学を、病理学と解剖学の楕桎から脱せしめて、生理学と合流させたフロイドの大功績を無視してはならぬね」

先生はそう言つて、ちょっと黙つた。そして、次のようにつけ加えた。

「前のパラノイアはまったく人間精神界のうちの内界の問題だ、けれども神経症は、外界と精神界との境に問題がある。だから神経症の研究で一番注意しなくてはならぬのは、一家の秘密に立ち入らねばならぬときだ。今日の例でもそうだが、あの子供の病氣は、両親の秘密に何か関係が



あるような気がするんだ」

小児神経症の患者、松村真一君は、金曜日の午後、ただちに入院した。実習にきている学生のうちに、当時医科大学四年生であった私がいたのである。私は岡村医学士について、実習をしていたので、当然この患者の主治医介補になって、患者の父親にも母親にも紹介された。父親は、松村平助、商売はブローカーであったが、瘦せた背の高い男であった。私には、どこことなく高い教養を積んでいる人とは思えなかった。母親の方はこれに反して、相当の教育を受けた人という感じがあった。名前は美代子といった。患者は翌日から、午前と午後の二回、精神分析室に連れてきて、岡村医学士が診問する。分析室は天心池先生の設計で作られた、外界の音響がよく遮断してあり、明暗が自由になる、気持よい部屋で、主治医と患者二人だけで対坐する。分析医は静かに患者を落ちつかせて、思い出すことを何でも話させる。指導教授、または学生実習者が、この問答をきくことができるように、隣室が設けられているが、これは分析室の方からは少しもわからないような構造にできている。私は実習生であるから、この隣室に入って筆記するのである。

土曜日に、岡村学士は子供と母親とを分析室に入れた。

主なる問答は、次のごとくである。

「君、馬は嫌いかい」

「ううん、好きだ」

「前に嫌いだったのを覚えているかい。何かそれについて話してごらん」

「もう先、お父さんが大きな馬のおもちゃを買ってくれたんだよ。僕、そのとき怖がったもんだから、お母さんがすぐしまっちゃった。それで、ときどき馬あるかいときくと、しまっているからけっして出てこないといったんだよ。ところが僕、馬が好きになってきたから、出してくれるように頼んだけれど、初めは、そのうちに出してくれると言ったんだけど、ほんとうはお母さんがなくしてしまっただよ」

「新しいの買ってもらったんだろ」

「うん」

「古い方とどっちが大きかったの」

「古い方が大きくて、いいのだったよ」

子供を退場させて、あとで母親にきくと、このことは事実で、馬の玩具を初め怖がったが、練習によって癒るだろうというのでときどき出して見せた。ますますひどくなるので、置いたといつて、実は処分してしまったが、本人は